

IICCG (第1回国際クリティカル地理学会) の (多分に私的な) 報告

—1997. 9. 1—

堤 研二*

Kenji TSUTSUMI

Report on the IICCG (First International Conference of Critical Geography)

1. IICCG の日程・参加者など

去る8月10日(日)から13日(水)の4日間にわたって、カナダ西海岸のブリティッシュ・コロンビア(BC)州バンクーバーにあるブリティッシュ・コロンビア大学(バンクーバーの西のはずれにある。以下、UBC)とサイモン・フレイザー大学(バンクーバーの商業中心近くのダウンタウンにあるハーバー・センター・ビルのカampus。以下、SFU)を主会場として、クリティカル・ジオグラフィーに関する初の国際学会(Inaugural International Conference in Critical Geography)(略称は、IICCG)が開催された。参加者はカナダ、アメリカを中心に数十カ国から約300名。その中には、D. グレゴリー、N. スミス、E. ソジャ、P. ノックス、A. プレッド、A. コバヤシ、T. バーンズ、G. プラットなどが居た。

2. 出発前の状況

★8月8日(金)

台風11号が近づいているので、明日夕方発の関空からの便に絶対遅れないよう、JRの切符を今日松江発の夜行寝台に変更した。当初は当日朝のJRで松江を発つ予定だった。変更手続きから帰ると、航空券を頼んでいた会社から確認の電話があり、台風に就き関空に遅れないように到着して、航空便に乗り遅れないよう、とのこと。その点承知してすでに出発予定を早めたことを伝えた。夜10時13分発の急行「だいせん号」に乗り込む。家族連れが深夜2時過ぎまで騒いでいて眠れなかった。

★8月9日(土)

大阪から新大阪まで快速列車。新大阪から「はるか」に乗り、午前9時少し過ぎに関空に着いた。これ

でどうにか飛行機には(それが台風で飛ばないことがない限り)間に合う。でも、8時間も待たなければならぬ。縁辺地域松江からバンクーバーまで36時間かけて行くことになった。以前水内さんと南回りでドイツに行ったとき、40時間以上かかったが、あの時は2人旅だったので、それほど長く感じなかった。水内さんは「鉄ちゃん」なので(これは、業界ではトップ・シークレットか?)、色々乗り換えることが楽しいらしい。伊丹からチャンギ空港、そこでアテネ経由ウィーン行きの航空機に乗り換え、ウィーンから列車でミュンヘン乗り換えでハイデルベルク着、というのがその時の行程。疲れ果ててハイデルベルク大学へ行った時、「ドチラカラコレマシタカ?」と留学生らしい方から日本語で聞かれたので、ぶっきらぼうに「日本からです」と答えた。あとから、その人が岐阜大学の小林浩二先生だったと知り、あの時の質問が日本のどこから来たか、という意味だったことに気づき、小林先生に謝ることになった。先生は笑って許して下さった。懐かしい思い出だ。

今回の行程は、松江→関空→サンフランシスコ乗り換え→バンクーバーの一人旅である。昨年1月から2月にかけてトロントへ行き、気温-24℃を経験した。その際の往復の旅程が、バンクーバーでトランジットだった。その意味では、バンクーバーへ行くのは3度目(?)である。ほぼ、予定通りに飛行機が飛んだ。自宅を出て以来、ほぼ1日半かけてUBCに到着した。

3. 第1日

大会前日の8月9日(土)には歓迎パーティがUBCで行われ(私は36時間の長旅のはてに到着したばかりだったので欠席)、翌日午前10時からUBCの地理学ビルディング近くの”First Nations House”というカナダ西

* 大阪大学大学院人文学研究科(執筆当時 島根大学法文学部)

海岸のネイティブの文化を取り込んだ木造の建物で開会式があった。ネイティブの儀式にのっとり参加者全員起立して手をつなぎあって、盛會を祈った。この後、BC州の概要説明や挨拶などが複数の人によって行われた。昼食はビルマ料理のバイキング。売り上げはビルマ難民援助に当てられるとのことだった。昼食では、気さくな韓国の若手研究者らと自然に集まり、一緒に芝生に座って話を弾ませた。

数百人の出席者の中で、ジャケットにネクタイという服装は私一人だったので、昼食後、大学内の宿舎に戻って着替えてきたのは言うまでもない。あのN. スミスは、Tシャツに短パン、サンダルという格好で頭の上にはサングラスをのせていた。皆んな、かなりラフな服装をしていて、日本の形式主義的な学会とは雰囲気はかなり異なっていた。午後からは早速ペーパー・セッション（以下、PS）が始まった。なお、今学会のPSは90分単位で、その中で3～4の発表が行われたり、パネル・ディスカッションが行われたりする。場合によっては、PSが複数の時間帯にまたがることもあった。フルに開かれる場合のPSは、午前2単位、午後2単位が持たれた。第1日の午後だけでも以下の8つのPS等が催された。日本からの2人の参加者のうちのもう一人、水岡先生もこの午後のセッションから参加された。

- Flexible accumulation and the spectacularization of space
- Locating the politics of theory in critical human geography
- Globalising cities
- Critical geopolitics
- Locations and transnationalisms
- Media and communications
- Eating the other: Cannibalism and consumption
- Quality, purity and taste: Obstacles to global food

4. 第2日

第2日(8月11日、月曜日)から翌日にかけては、場所をSFUに移した。そのキャンパスは、UBCからバスで40分ほどの、ダウンタウンの真ん中に立地している。この日のPS等は午前と午後あわせて15。以下の通り。

- Raumlisches Denken
→このPSのタイトルだけなぜドイツ/オーストリア語

- Histories/Geographies of the colonial present
- Locating the politics of theory in critical human geography
(continued)

→ここのサブ・セッションで水岡先生の発表が行われた。タイトルは、"Society but space?: The development of alternative geography in Japan - in relation to a commission of the Assn. of Japanese Geographers, Society and Space"→地理評欧文版(B)の69-1, pp. 95-112所収の論文の"The disciplinary dialectics that has played eternal pendulum swings: Spatial theories and disconstructionism in the history of alternative social and economic geography in Japan"を参照のこと。パソコンを持ち込んでの画期的なプレゼンテーションだった。

- Body, identity, space
- Political economy of South Korean development in the context of globalisation
→ここのセッションは韓国テグ大学のチョイ先生がオーガナイズされた。この中のサブ・セッションで堤が発表。タイトルは、"A most uneven developed country, Japan: Depopulated regions there"だった。セッション終了後、韓国の人たち十数人と、ダウンタウンで夕食をともにした。
- Globalising cities (continued)
- Narratives of the corporation: negotiating class and regional futures
- Modelling black boxes: science, technology and other
- Economic geographies
- Judgement and acceptable error in environmental issues
- Nature, society and critical political ecology
- Critical perspectives on migration and circulation
- Space/theory
- Culture and urban space
- Nature

5. 第3日

第3日(8月12日、火曜日)は昼12時30分までで2単位のPS等を行い、午後は複数のフィールド・トリップが行われた。私は水岡先生と一緒にA. コバヤシ氏(クイーンズ大学、カナダ)案内の戦前"Japanese Town"があったPowell Streetへの巡検に参加した。私の祖父の従姉妹がバンクーバーへ移民して来ていたこともあって興味を持っていた。カナダの日系人も太平洋戦争が始まると財産などを没収されて強制的にキャンプに収容された。これによって、この街から日系人の姿はなくなったが、彼らの生活の面影が

景観に刻まれていた。数十人の日系人が戦後ここに戻ってきたが、高齢化が進んでいる。そこには「隣組」という、日系人(とくに高齢化の進んだ1世)を援助したり、日系人の相互交流をするための組織があり、その山城猛夫さんにお話を伺った。彼は広島県出身。40代後半か50代前半だろうか。北九州市で仕事をしている時、都市対抗野球にも出たという。それで平和台球場が栄えていた頃の昔の福岡市の街を懐かしがっておられた。20年ほど前にバンクーバーに来たという。趣味は邦楽。昨年、邦楽家の藤井凡大が亡くなったことを伝えたらびっくりしておられた。彼の祖父も日系移民であった。カナダのクイーンズ大学のA. コバヤシさんの祖父も日系移民だったというが(コバヤシさんは三世だろうか?)、コバヤシさんは、日系移民の会合などにもオンタリオの代表などとしてよく出席されていたそうだ。日系移民は太平洋戦争が始まると、財産凍結の上、キャンプに強制的に収容された。戦後補償が実現したのは80年代である。その間、カナダの日系移民(1世)は、裸一貫から再度自分の生活を築かなければならなかった。彼女の論文などには、「景観はダンスである」という表現があったが("Remaking Human Geography"所収)、旧日系移民街には、住む主が変わった後も、日本の様式を取り入れた家屋や、紋、エントランスにある日本の姓をあしらったタイルなどが往事を偲ばせた。後に、バンクーバーを早朝に発つ日、8月16日の未明から寝ずにカナダのたぶん国営か何かのテレビ局の番組を見ていたら、"The Asian Culture in Canada"というテーマのシンポジウム何かを放送していた。8月9日にオンタリオ州で行われたものだ。何気なく画面を見ていたら、あのA. コバヤシさんが客席で映っていた。そのまま見ていたら、テーマが"The Asian experience in Canada"に変わって、そこから彼女がパネラーの一人として、発表していた。今回の大会に出席して、彼女が日系移民の福利に関する運動に携わっていたことを初めて知ったわけだったが、芯の強い人だと感じた。彼女はマックギル大学からクイーンズ大学へ移ったが、そこでのポストはフェミニズムに関する講座のものである旨、学会時に言っておられた。水岡先生は大学の海外巡検では、来年はカナダの日系人について調べようか、などと言っておられた。

なお、この日のPS等は以下の通りで、午前の部だけだったのに12もあった。

- Geography and ethics
- Space and social theory

- Regulation/power
- Globalisation, transformation and resistance in old industrial space
- Transnationalism and the changing geography of borders and boundaries
- Decolonizing the classroom
- Radical and rural
- Postcolonial geographies
- Globalization
- Takin it to the streets I (II off site)
- International network for urban research and action
- Cycles of popular struggle

なお、この日の夜、ビア・パーティがUBCで行われた。午後6時からと言うことで行ってみると、私一人しか来てない。40分ほどして三々五々参加者が増えてきた。これが、こちらのスタイルだとわかった。私は、会場隅のビリヤード・プールで、メキシコから来た10歳の男の子とカナダ人の相手をしていた。

その横に、D. グレゴリーがやってきて、早口で何かしゃべってきたが、向こうもこっちも酔っていたので、そのときは話さずじまいだった。グレゴリーと水岡先生と私とであとで話をしようということになった。私は卒論を書いた後から、グレゴリーの著作"Regional Transformation and Industrial Revolution"(1982)を読み、その影響を受けていた。八女茶業の近代化に関する論攷として、卒論を大幅にリライトした際にも、彼のこの著作のフレームワークを再解釈したクロークの枠組みを援用した。彼の著作は、ギデンズの構造化理論をヨークシャー羊毛工業地域の変容に結びつけ、羊毛業者らのエージェンシーに注目したものであったが、はつきりいって、この本の前段と後段とがうまくつながっていない印象を持っていたし、グレゴリー自身、この本について後に言及しなくなり、彼自身の文献リストからも漏れるようになっていった。このあたりのことについて話を聞きたかった。その日は、結局、話ができなかった(すでに学会初日に、不在の彼宛に手紙を渡してもらっていたので、大会終了日の翌日に彼の部屋を訪問した。しかし、廊下に大きな犬がなぜか飼われていて吠えられてしまった。彼の犬かどうか知らないが、こちらも向こうもびっくりしてしまった。結局、グレゴリーには会えずじまい。渡すつもり書類を秘書に託して地理学ビルを後にした)。

ビア・パーティのあと、韓国の若手の人たちに誘われて彼らの宿舎へ行き、2時頃まで飲んだ。いきなりシーバスリーガルが2本出てきたので、「ブル

ジョアだなー」と冷やかすと、「免税品店で買ったので安かった」と言われた。中にテッコンドー二段の人がいた。彼に「私は山村研究をやっているので、山中でクマと出会ったら戦わなければならない。だから拳法と空手をやっているんだ」と冗談で言ったら本気にしていた。彼に私は25歳だと言っていた。もちろん本気にはされなかったが（本当は一回り上）、「そんなに言うのなら、ツツミ、肩をもめ」と言ったので、これ幸い、少林寺の整体法で揉んであげたら、すごく身をよじらせていた。自慢にならないが、日本で一番マッサージがうまい地理学者(?)が私であることを知らなかったのだ。と、こういうわけで、彼らとはすっかり打ち解けた。

6. 第4日(最終日)

最終日(8月13日、水曜日)には、午前中にPS等が行われ、午後は全員でランチの後、今後のこの会の持ち方などについて協議した。午前の部のPS等だけでも、以下の12セッションが営まれた。

- Identity
- Global transformations
- Mapping/printing/surfing: communication technologies
- Critical geography and/in institutional spaces
- Sites of resistance I, II
- Global processes and local place: (Future) Histories of the Pacific
- Northwest
- Selling nature
- Identity, gender and the states
- Urban divisions and exclusions
- Methods and analyses
- Race, ethnicity and the popular imagination
- Public infiltrations

午後のワークショップ(司会はN. スミス)で、今回の会についての意見の表明や、今後の会の持ち方をどうするかなどの議論が為された。その中で、大部分の発表者のプレゼンテーションが早口の英語でなされ、しかもその多くがレジユメなどのアウトプット配布もなしで行われたので、英語がネイティブの言語でない参加者に対しては、プレゼンテーションをもっとヴィジュアル化するなどの工夫が必要であろう、等という納得できる提言(水岡先生による)なども為された。次の学会の開催について

は、西暦2000年のソウルでのICGにあわせて行うのかどうか、などという意見が出された。今回、韓国からの研究者のとりまとめ役であったチョイ先生からの意見表明があったのであるが、結論は後日に持ち越された(この件もあって韓国からの参加者が多かったのかも知れない)。各地域で分科会的会合を持つ案も出されたが、これもとりあえず保留(ただし、日本と韓国とは交流を開始する旨、発表された)。まずは、各地域別に連絡役が決められ、日本の担当は水岡先生となった。

このワークショップの後、大会は成功裡に閉会された。この日の夕方、水岡先生とこの日到着の奥様(極めて聡明な方だ)と3人でダウンタウンへ行き、食事をした。その一部には再開発の計画があり、至る所に「ジェントリフィケーション反対」とか「ヤッピーにxxを」といった落書きがみられた。ホームレスの人々がねぐらを追われることになるからであろうか。生活の場を追われるのは気の毒なことだ。一方、前日にダウンタウンで日本人観光客が襲われ金品を盗まれたが、新聞によれば日本人観光客が恰好のターゲットになっているとのことだった。昨日、フィールド・トリップのあと、水岡先生と別れ、一人ダウンタウンを歩いて(走って)帰ってきたが、立ち止まらないよう、常に小走りにならざるをえなかった。途中、何度も声をかけられ、手をかけられそうになった。赤信号になると、青信号になった方の横断歩道を渡るようにして、立ち止まらないようにした。

7. 大会終了後の出来事など

大会の終了した翌日、UBCのD. レイ先生から昼食に招待された。前日の昼食会(堤は欠席)で水岡先生が彼と会った際にそのような招待を受けたとのことだった。かねて、東京にレイ先生が来られた時の写真を渡しておいた。経済地理学会のシンポジウム(1993年5月、明治大学)に参加されたあと、懇親会を行った時のものである。久しぶりにお会いしたレイ先生はとても元気そうで、我々にもわかりやすくゆっくりとした英語で話して下さった。昼食には昨日到着された水岡先生の奥様とUBCのD. エジントン先生(日本企業研究などをしておられる。筑波大学に留学されていたとのこと。京都にもご家族で滞在経験があるそうだ。私の知人のデュイスブルク大学のフリュヒター先生や国連大学のウイット先生もご存じとのこと)も一緒だった。場所は大学のゴル

フコースのクラブ・ハウスだった。短い時間だったが、白ワインとサーモン料理を楽しみながら、会話も弾んだ。レイ先生は、自家用車のバンで明日から海岸近くのサイトに子供たちとキャンプに行くという。9歳の彼の息子は、次の進学に際して、英語・仏語以外の言語が勉強できる、マイノリティーの生徒が多くいるような学校を選んだそうだ。食事の後、駐車場へ向かう間にレイ先生は今回の学会の感想を私に求められた。私は「とても刺激と印象を受けたが、ファッショナブルなトピックのものが多かった。とくに都市研究が多く、私の縁辺地域研究にどう結びつけられるか考えるのは容易ではない。例えば、縁辺地域住民の共同主観性などの方面での展開は重要な、と思う」と答えた。すると「まもなくニューファンドランドでカナダ地理学会がある（堤注：水岡ご夫妻はIICCG後、こちらへも参加された）。そこでもそういう発表がいくつかあるはずで、それは重要な課題だ。」と言われた。「そういえば、トロント大学のL. ブーン（ブーン）先生も、修士論文は鉱山町のゴーストタウン化／地域変容だったですよ」と言うのと「そうそう。カナダは北部地域問題を抱えているんだ」と言われた。松江はラフカディオ・ハーンのゆかりの地で場所にまつわる様々な伝説・怪談がふんだんに残っていておもしろいところなので、次の来日時には是非いらして下さい、とも伝えたら、たいそう喜ばれた。

UBCには、大学の研究・教育用の施設のほか、宿泊施設（私はここのキッチン付きの部屋に7泊した。おかげで自炊もできた。1泊の基本料金は60カナダドル、約5,300円くらいだった）、劇場／映画館、人類学博物館などもあった。ここのキャンパスは、島根大学の20倍以上の広さはある。北端から南端まで歩くのに40分はかかった。特筆すべきは新渡戸稲造を記念してつくられた日本式庭園の"Nitobe Memorial Garden"である。キャンパスの北西部にある。新渡戸はバンクーバー近くのビクトリアの病院で没している。太平洋の架け橋にならむ、という彼の言葉を刻んだ石碑もあった。ここの庭園は日系人（たぶん1世）が設計している。たまたま彼の訃報を伝える新聞記事を滞在中に読むことになって知った。人類学博物館には、太平洋岸のネイティブの人々の文化異物を中心とした展示が為されていた。日本からの語学セミナー参加者も多数見学に来ていた。おそらくは立命館の協力で建てられた"Ritsumeikan UBC House"なる建物もあった。なお、UBCでのキャンパスライフなどについては、最近の雑誌『地理』に京都教育大学の香川貴志さんによる連載があるので参照

して頂きたい。

8. 今回の学会でのキーワードと今後の課題

今回の学会で私がキーワードとして感じたものを（主観的であるが）列挙しておく。これらを手がかりに今回の学会の雰囲気をつかむこともできるであろう。

- articulation
- colonialization, post-colonialization, post-colonialism
- critical
- decentering, destabilizing
- flexibility, flexible accumulation
- flexible metropolis
- Fordism, post-Fordism, zombie-Fordism
- gentrification
- globalis(z)ation, globality
- locality, location
- metropolis
- modernity, post-modernity
- political economy, political ecology
- racism
- radical
- restructuring
- spectacularization
- transnationalism
- uneven development

これらを一瞥すると、クリティカル地理学の最前線を感じ取ることができているが、他方で物足りない側面が残るのも否めない。とくに、発展途上地域からの参加者や非都市地域の研究者にとっては、発表内容を総合的にみた場合の西洋社会・都市研究への「偏り」を意識されることにもなったであろうが、それはそれで、そういう研究者にとっての自分の研究の位置づけを新たな地平の中で行う可能性を考える時、決して無意味なことでもなかった、と思う。それも、今後、カナダや欧米以外の地域でこの学会を開催する際に、研究の新展開が可能となる契機にもなる。

また、おそらくは、今回の学会を契機になんらかの書物くらい出版されるかもしれない。

9. 韓国の研究者たちと今後の交流計画

今回、私がこの学会に参加するきっかけを与えてくれたのは、韓国のテグ大学のチョイ (Choi Byung-Doo) 先生だった。彼はジョンズ・ホプキンス大学のハーヴェイ先生のところへ留学中だった。今年の春、突然彼から手紙を受け取った。面識はなかった。東北大学のキムさんから私の名前を聞いたとのこと。その手紙では、IICCGへの日本からの参加を要請されていた。早速、各方面に連絡をとったが、参加できる人を見つけれなかった。私自身は、5月のスウェーデン行きがあったので、年に2回も私費で海外渡航するのは無理であると考えていた。そこでチョイ先生に、日本からの参加者が居そうにないことを、電子メールで出そうとしていたが、韓国から若手を中心に10名以上の人が来ること、台湾からも参加者があることなどを考えると、日本から参加者がゼロなもの、心のどこかでひっかかった。力不足ではあるが、今後のネットワークづくりのためにも、私が行こうと、決心した。家内も了承してくれた。そこで、電子メールの内容を変更し、及ばずながら1名だけだが、私が参加する旨をチョイ先生に連絡した。それから先生は、電子メールやファックスで細かい対応をして下さった。この後で水岡先生も参加されることを知った。

学会初日、チョイ先生とお会いした。小柄で気さくな先生である。また、日を重ねるほどに、先生の誠実な人柄、細かい気配りに感銘を受けた。彼は44歳で、ソウル大学を卒業後、リーズ大学に留学し、A. ウィルソンのもとで社会理論に関する研究を行った。彼は "Social Justice and the City" や "The Limits to Capital" などを一人で翻訳したという。『資本論』が発禁であった国でのこれらの翻訳書の出版に苦勞されたようだ。このほかの韓国からの参加者は、30代の若手が多かった。チョイ先生らは、韓国でKASER (The Korean Association of Space and Environment Research) を組織して、80年代の終わりからシンポジウムの挙行、雑誌・書籍の出版を行っている。

こういうことから、チョイ先生、水岡先生と私とで協議して、可能なところからの交流をすることとし、まずは、本年11月の人文地理学会の直前にチョイ先生に来ていただいて、日本の研究者との会合を持つこととした。また、これを契機に、韓国と日本で交互に研究集会を持つことも検討された。手始めにまずチョイ先生に来ていただくこととなり、11月14日(金)の人文地理学会前日を予定することとなった。また、インフォメーションが流されることにな

ろう。このことは、IICCGに参加した大きな成果の一つとなった。

今回、残念ながら日本からの参加は2人だけであった。次回あるいは、小会合では、より多くの、しかもより若い人たちの参加を期待したい。まずは11月の会合への多くの方々の出席を心待ちにしている。

10. 余録

今回の学会では、準備がよく行き届いていた。電子メールとインターネットを使った情報の提供と種々の申し込み受け付けは威力を発揮した。学会の登録料は160カナダ・ドル (1万4千円くらい) だったが、数回の食事や毎日のコーヒーなどの飲料費も含まれており、決して高くはなかった。また、参加者にはIICCGのロゴ入りの蓋付きカップも配られた。書籍コーナーは初日だけ設けられたが、ルートレッジなどの出版社が直接販売に来ていた。カードも使え、後日書籍を送ってくれることもしてくれたので助かった。大会期間中、IICCGのTシャツも販売されていた。なかなかシャレた配慮だったが、こういった準備が、果たしてできる国や大学があるかどうか、最終日のワークショップでも話題となった。次回の開催がどうなるかは、まだ保留されている状態であるが、今回の発の学会開催の意義は大きく、今回の形態がどうであれ、その展開が(とくに非西洋社会/発展途上国の研究者たちからの今回の主流層に対する意見や異議申し立てによって) 新たな地理学の道の一つを開く可能性を持つであろうことにワクワクしてしまう。

今回の参加者には高校教師や大学院生もいた。参加者は、名前のみを記したカードを首から下げて会に臨んだが、そこには所属が記されていなかった。自由な討議を促すための配慮だったと水岡先生は言われた。そのおかげで、実に活発な議論が為されたように思う。研究活動はすべて制度化されると閉塞するので、こういう試みは重要だ。いわば、実力勝負の世界とも言える。

重ねて記すが、次回には日本からもより多くの、より若い人たちが参加されるのを期待している。